

祭りをとおしてみる地域社会 ～事例研究：沖縄県竹富島の種子取祭～

谷沢 明

沖縄県竹富島でおこなわれる種子取祭（国指定重要無形民俗文化財）は、地域社会にとって、人々の絆を醸成する祭礼である。すなわち、一致協力する精神「うつぐみの心」を育み、その精神を再確認する祭事として島民に意識されている。種子取祭は、粟の種子下ろしを中心とする農耕儀礼を基にするが、粟栽培の衰退に伴い、祭事の根幹をなす種子下ろし行事は廃絶寸前となっている。ところが、祭事に付随する奉納芸能は、新たな芸能がつけ加わり、ますます盛況を帯びている。種子取祭には、東京・沖縄・石垣在住の郷友会メンバー（島出身者）が多数帰郷し、島民に交じって芸能を奉納するにいたっている。財政的に見ても、祭の運営は、島出身者の寄付によるところが大であるが、分に応じて、島民が金銭的賦課、労力的夫役を負担することで祭事が支えられている。本稿は、祭をとおして地域社会の仕組みを解説することを目的とするものである。

はじめに

沖縄県竹富島は、豊かな自然環境、良好な集落景観、そして民俗芸能と中心とする伝統文化を活かして地域づくりを推進してきた地域である。島民が一致団結して自律的な地域社会を形成してきた経緯は、拙稿「沖縄県竹富島における観光文化に関する考察」（2009年）¹⁾、「1970年代前期の開発と保存に関する動向」（2010年）²⁾、「1980年代の集落保存に関する動向」（2010年）³⁾、「集落景観・地域文化を活かす地域づくり」（2011年）⁴⁾において述べたとおりである。

竹富島には、数多くの祭事・行事が伝承されている。現在、地域ぐるみでおこなわれる行事として、国の重要無形民俗文化財に指定された種子取祭（タナドゥイ）をはじめ、21の祭事・行事がある。⁵⁾とりわけ種子取祭は9日間に及ぶ祭事であり、ほかにも2～3日にわたる祭事がいくつかあるため、1年のうち37日間は地域ぐるみの祭事・行事がおこなわれていることになる。戦後しばらくまでは、さらに多くの行事があったが、1949年4月に祭政分離のために11の行事が廃止された。

竹富島は、地域住民の絆がきわめて強い島として知られている。その精神的支柱となっているものが、種子取祭をはじめとする各種の祭事・行事である。とりわけ種子取祭の執行は、島民にとって重要な意味をもっている。種子取祭に奉仕することは、祭りをとおして神に奉仕することに通じる、と島民は信じているからである。そして、祭りをとおして、一致協力する精神「うつぐみ」を発揮することは美徳であり、何よりも尊いことである、と意識しているからである。

本稿では、2010年10月1日から9日にわたって執りおこなわれた種子取祭の参与観察調査にもとづき、関係者のインタビュー調査を中心に、祭りをとおしてみる地域社会の姿を明らかにしたい。なお、文中、敬称を省略したことをおことわりする。

1. 種子取祭の由来

種子取祭は、秋の甲申の「トゥルッキ」に始まり、壬辰の「支払い議会」まで9日間にわたっておこなわれる、農耕儀礼を基にした祭事である。これに先立ち、旧暦の8月8日、ユンカイ（世迎え）が島の西海岸の浜辺でおこなわれる。ユンカイは、ニーランの神が、ニーランの国から穀物の種子をもってきて、小波本（幸本）御嶽の中にあるクスクバーの丘に登り、ハマワリの神に命じて穀物の種子を八重山中に配った、という伝承にもとづく神迎えである。いわゆる、沖縄・奄美地方に分布するニライカナイ信仰にもとづく神事である。この種子（粟）を畑に下ろす行事・祈願が、種子取祭五日目の戊子におこなわれるが、まさに農耕儀礼としての性格がそこに潜んでいる。ただし、粟を食べなくなった現在、この種子下ろしの行事を続けているのは、私の知る限りでは、わずか一軒（前本隆一家）にしか過ぎない。現在の種子取祭は、七日目（庚寅）から八日目（辛卯）の両日おこなわれる神事・奉納芸能および、七日目に夜どおしくりひろげられるユークイ（世乞い）が、中心的行事として人々に意識されている。

種子取祭の由来は、上勢頭亨『竹富島誌 民話・民俗篇』に次のように記されている。簡にして要を得ているので、全文紹介する。⁶⁾

〈節祭りより四十九日目にあたる「つちのえね」の日を祭日とする。祓い清めた土地に種子を蒔き始める祭りである。苗代おろしの祈願をし、蒔き入れる種子が一粒万培となって豊作豊年であるよう、太平の御代の神として崇められている弥勒様に祈願する。そして世持お嶽の神前で行列踊り、舞踊が演じられる。この行事は準備段階を含め「きのえさる」の日から始まり、「みずのとみ」に至る十日間行われる。奉納踊りは最初「かのえとら」の日を根原金殿の行事として、後の「かのとう」の日を幸本節瓦殿の行事として行い、二日間にまたがり行列や余興がなされる。一日目の夜は世乞（ユクイ）の行事が各戸ごとに夜通し行われる。祭りは世持お嶽にある火の神、農耕の神の二神の前で行う。竹富島の年中行事の中で最も大きい祭りである。〉

若干の補足をしたい。弥勒様に祈願とは、七日目の早朝、弥勒奉安殿前でおこなわれる「弥勒起こし」を指し、豊穰と繁栄が祈願される。行列踊りは、七・八の両日奉納される「庭の芸能」を、舞踊は、七日目に旧玻座間村、八日目に旧仲筋村により奉納される「舞台の芸能」を指す。なお、「舞台の芸能」の最初の演目・長者（ホンジャー）に続いて、両日も「弥勒」の芸能が奉納される。なお、祭りは十日間行われる、と記されているが、最終日の種子取り物忌みの行事（毒虫・害虫・台風の被害がないようにと作物の生育を祈る）は、現在、省略されている。

奉納踊りは、初日が根原金殿の行事（旧玻座間村が奉納）、翌日が幸本節瓦殿（旧仲筋村が奉納）の行事として行われる、と記されているが、これは集落形成の伝承とも関わりをもっている。すなわち、昔、竹富島には六つの村があり、六名の酋長が住んでいて（玻座間村・根原金殿、仲筋村・新志花重成殿、小波本村・幸本節瓦殿、久間原村・久間原発金殿、花城村・他金殿、波利若村・塩川殿）、別々に種子取祭を営んでいた、という。その統合について、次の伝承がある。⁷⁾

〈根原金殿は最も勢力が強く、また徳の高い人で、六名の酋長が三つに別れて別々に種子取祭を営むのは民財の消費が大きい、六人の酋長が心を合わせて行事を行なうのが将来の竹富島

のためであり、神からの恵みも大きくなり農作物の豊穰も期待できると考え、自分の選んだツチノエネの吉日にこの行事をまとめたと思い、南方の村の酋長である節瓦殿に自分の妹を嫁がせて、その対策を講じた。)

暦を統一することは、すなわち勢力のある者が、そうでない者を統合することを意味している。種子取祭の「種子下ろし」が、根原金殿がおこなっていた暦日に統一されたことは、時代的にみて矛盾を生じる。それは、根原金殿の時代と、八重山地方に暦が普及した時代が離れているからである。狩俣恵一は「竹富島の種子取祭」において、次の見解を示している。⁸⁾

〈種子取祭の統一は、八重山に暦が広まり暦注に関心が集まったと考えられる十七世紀以降の出来事であったと思われるが、種子取祭の由来伝承は、その事件を十七世紀以後の出来事とはしないで、古い根原金殿の時代（ムーヤマの神々が活躍した時代）の話として語ったのである。その理由は、竹富島では、古くから六人の神々による六つの村の始まりの神話伝承が既に語られていたからで、その神話を土台にして、種子取祭の由来伝承だったのである。新しい出来事が、古い伝説と結び付いて、さらなる新しい伝説を形成する。〉

なお、今日の竹富集落は、島の中央部に形成されており、竹富小中学校を挟んで北方が旧玻座間村（東集落・西集落）、南方が旧仲筋村（仲筋集落）となっている。奉納踊りに関しては、玻座間村だけではなく、昔、南にあったとされる小波本村（現在、仲筋集落内に小波本御嶽が残されている）の幸本節瓦殿（東方の村の三名の酋長に統合の話をもちかけた人）の行事としても残され、旧玻座間村と旧仲筋村が芸を競う形でおこなわれている。

2. 種子取祭の次第

2010年の種子取祭は、次のような次第で執りおこなわれた（〈表1〉参照）。

〈表1〉2010年種子取祭の次第

10月1日	トゥルツキ：午後8時、玻座間・仲筋の長者（ホンジャー）の家に関係者が参集し、無事に奉納芸能が尽くせるようにと祈願をおこなう。
10月2～4日	種子取祭の諸準備をおこなう。夕食後、奉納芸能である狂言・踊りの稽古をおこなう。4日の午後4時から世持御嶽周辺の草取りおよび清掃作業。
10月5日	幕舎張り：午前8時から神前の鉄パイプの上にテントを張り、奉納芸能の舞台を設営。 種子取祭の願い：午後2時、5名の神司・公民館執行部が玻座間御嶽で祈願。その後、世持御嶽、清明御嶽、根原家を回って祈願。この日、5名の神司は、それぞれが受け持つ御嶽で、神々に玻座間御嶽に参集するように案内する（都合のよい時間に適宜おこなう）。 種下ろし：粟の播種。 イイヤチづくり：祭りの食べ物イイヤチ（モチゴメ・モチアワ・アズキ）をつくる。
10月6日	ンガソージ：前日蒔いた種が根づくように、精進潔斎をおこなう物忌みの日。 この日、イイヤチを戸主の姉妹や叔母などに届ける（以前は女性を家に招いてもてなした）。 種子取祭の講話：午後5時から、全国竹富島文化協会主催による講話（講師：上勢頭芳徳）。 カメラマンに対して、撮影の諸注意も併せておこなわれる。 弥勒の地唄稽古：午後7時から、与那国吉哲家でおこなわれる。 フクミ：奉納芸能稽古の総仕上げ。午後8時から、公民館執行部・三郷友会長（東京・沖縄・石垣）は、稽古場を訪問して挨拶・激励する。

10月7日	<p>弥勒起こし：午前6時、弥勒奉安殿で、与那国家当主、大山家当主、公民館執行部、長老、三郷友会長らが祈願。</p> <p>玻座間御嶽での祈願：午前6時、弥勒起こしと同時に、玻座間御嶽で5名の神司が祈願。</p> <p>バルヒルの願い：弥勒奉安殿と玻座間御嶽で祈っていた人々が世持御嶽に参集し、蒔いた種子が発芽するように祈願。</p> <p>イバン取り：イバン（クネンボの葉）を公民館主事が弥勒奉安殿裏で摘む。</p> <p>乾鯛の儀：奉納芸能の舞台で、祭主である公民館長が参列者を供応する。</p> <p>参詣：午前8時、5名の神司を先頭に、公民館執行部、長老、三郷友会長ほか、ナビンドゥ（神の道）を通して仲筋集落の主事宅を訪問する。主事宅では、訪問者に食事を振る舞って接待する。</p> <p>庭の芸能：午前9時半から、世持御嶽境内で7つの芸能が奉納。</p> <p>舞台の芸能：午前10時半から、世持御嶽前の舞台で、狂言・踊り36演目が旧玻座間村により奉納。午後6時半終了。</p> <p>イバンカミ：ユークイ参加者が世持御嶽前に集まり、神前に供えてあったイバンをいただき、ティサージ（手巾）に折り込み、鉢巻をする。</p> <p>ユークイ：豊作を予祝するため、人々が各家を回る。最初は、根原金殿の末裔とされる根原家。ここから、それぞれ三集落に分かれてユークイをおこなう。今年は、東集落7軒、西集落11軒、仲筋集落5軒でユークイがおこなわれた。</p>
10月8日	<p>イバン返し：ユークイを終えた人々がイバンを返上する。</p> <p>ムイムイの願い：発芽した種子がすくすくと成長することを願う。</p> <p>シドゥリヤニ奉納：神にシドゥリヤニ踊りをささげ、豊作を祈願する。</p> <p>乾鯛の儀：奉納芸能の舞台で、祭主である公民館長が参列者を供応する。</p> <p>参詣：午前8時、5名の神司を先頭に、公民館執行部、長老、三郷友会長ほか、ナビンドゥを通して東集落の主事宅を訪問する。主事宅では、訪問者に食事を振る舞って接待する。</p> <p>庭の芸能：午前9時半から、世持御嶽境内で7つの芸能が奉納。</p> <p>舞台の芸能：午前10時半から、世持御嶽前の舞台で、狂言・踊り30演目が仲筋村により奉納。最後の演目「鬼捕り」終了後、祭主である公民館長が挨拶。午後5時半終了。世持御嶽に礼拝し、すべての祭事が終了する。</p>
10月9日	<p>懇談会：午前10時から、公民館において、公民館執行部・地域の重立ちと三郷友会長との懇談会が開催。今年の種子取祭の反省をおこない、来年に向けて意見を述べる。</p> <p>支払い議会：種子取祭の精算をする。</p> <p>夜、全国竹富島文化協会の総会が開催される。</p>

上記、9日間にわたる種子取祭の内容は、神事・種下ろし・奉納芸能・ユークイに大別される。主要な神事は、1日目の「トゥルッキ」に始まり、5日目の「種子取祭の願い」、7日目の「弥勒起こし」「玻座間御嶽での祈願」「バルヒルの願い」、8日目の「ムイムイの願い」である。まず、「種子取祭の願い」において、神々に玻座間御嶽に集まっていただくように案内をかけ、「バルヒルの願い」では、蒔いた種が発芽するように祈願する。そして、「ムイムイの願い」において発芽した種子がすくすくと成長することを願う。

「種下ろし」は、種子取祭において、最も大切な播種儀礼である。種下ろしは、第五日目（戊子）に、粟作を営む農家の戸主がそれぞれおこなう行事であるが、粟作が衰退した現在、この行事は廃絶寸前となっている。仲筋集落の前本隆一家が「種下ろし」を継承している、と聞き

見学をした。午後3時、前本家当主が畑に行き、ヘラ（農具）で土をならし、粟の種子を実際に蒔き、「戊子に蒔いた種子が立派に育ち、豊作になりますように」との唱えごとをする。そして、種子を蒔いた畑に、ススキの葉を結んだ魔よけのサンを立てて、行事は終わる。当主は、「種下ろしをやっているのは我が家が最後ではないか。私も歳だからいつまで続くやら…」と寂しげに話す。

奉納芸能・ユークイについては、別項を立てて後述する。

3. 祭礼組織

種子取祭は、六御嶽に仕える5名の神司（1名欠員）を中心に、公民館長が祭主となり、2名の公民館主事がこれを補佐し、〈表2〉の組織で執りおこなわれる。

2010年の竹富島の戸数・人口は、164戸・329人である（2010.5.10調査）。現役で種子取祭に関わる18歳～69歳人口は、164人（男性82人、女性82人）（2010.4.13調査）である。

〈表2〉に記した祭礼組織の「人員」は、あくまで「定員」であり、種子取祭執行に先立ち作成される役割表には、直前まで欠員として空欄になっているところもみられた。2010年の役割表に実際名前が挙がっていたのは、男性42名、女性44名であったが、人々の協力で充足できた。種子取祭には18歳～69歳人口の半数以上の人が、当初から男女ともに何らかの役割を持って関わっていることになる。

〈表2〉2010年種子取祭の祭礼組織

	役割	人員	役割	人員	役割	人員
男性 (93名)	総務係	2名	経理係	3名	受付係	2名
	供物係	2名	座待係	5名	膳配係	2名
	茶内係	1名	包丁係	1名	クーバン係	1名
	たみ取り係	1名	余興太鼓打ち係	2名	余興笛係	2名
	行列太鼓係	1名	男地唄係	9名	照明係	1名
	行列係	1名	マイク係	2名	踊り係	3名
	造花係	3名	余興進行係	2名	狂言師匠	2名
	玻座間狂言部	20名	仲筋狂言部	20名	主事使役	2名
	長者	2名	ミルク	1名		
女性 (60名)	給仕係	3名	踊り子(東)	11名	踊り子(西)	11名
	踊り子(仲筋)	11名	踊り師匠	9名	衣装準備係	9名
	女地唄	3名	ミルク衣装係	1名	主事使役	2名

*ただし、ここに記した「人員」は「定員」である。

とりわけ、奉納芸能に関わりを持つ人が半数以上を占めているのが特徴である。2010年の奉納芸能の組織は、〈表3〉のとおりである。

〈表3〉2010年種子取祭の奉納芸能の組織

男性	玻座間狂言部		仲筋狂言部	男地唄
	狂言師匠 1 名 (1 名) 狂言部 20 名 (12 名)		狂言師匠 1 名 (欠員) 仲筋狂言部 20 名 (8 名)	9 名 (5 名)
女性	東支会	西支会	仲筋支会	女地唄
	踊り師匠 3 名 (2 名) 踊り子 11 名 (8 名)	踊り師匠 3 名 (2 名) 踊り子 11 名 (8 名)	踊り師匠 3 名 (1 名) 踊り子 11 名 (7 名)	1 名 (1 名)

*人員は定員を記し、()内に2010年の役割表に実際名前が挙がっていた人数を記す。

奉納芸能は、男性が狂言、女性が踊りを受け持つ。竹富には、東・西・仲筋の三集落があり、東・西集落の男性が玻座間狂言部を、仲筋集落の男性が仲筋狂言部を結成している。また、女性の踊りグループは、三集落のそれぞれの支会ごとに結成されている（かつては、東・西が一つになっていた）。狂言部の定員は、師匠 2 名・部員 40 名の計 42 名。踊りの定員は、師匠 9 名・踊り子 33 名の計 42 名。2010 年の役割表に実際名前が挙がっていた人数は、狂言部男性 21 名、踊りの女性 28 名である。ほかに地唄を受け持つ人が 6 名いる。人口わずか 300 人余りの小島で、これだけの奉納芸能をおこなう人がいることに驚嘆する。300 余という人口の中には、奉納芸能の現役を退いた人も多数含まれているので、「芸能の島・竹富」という形容は的を得ている。

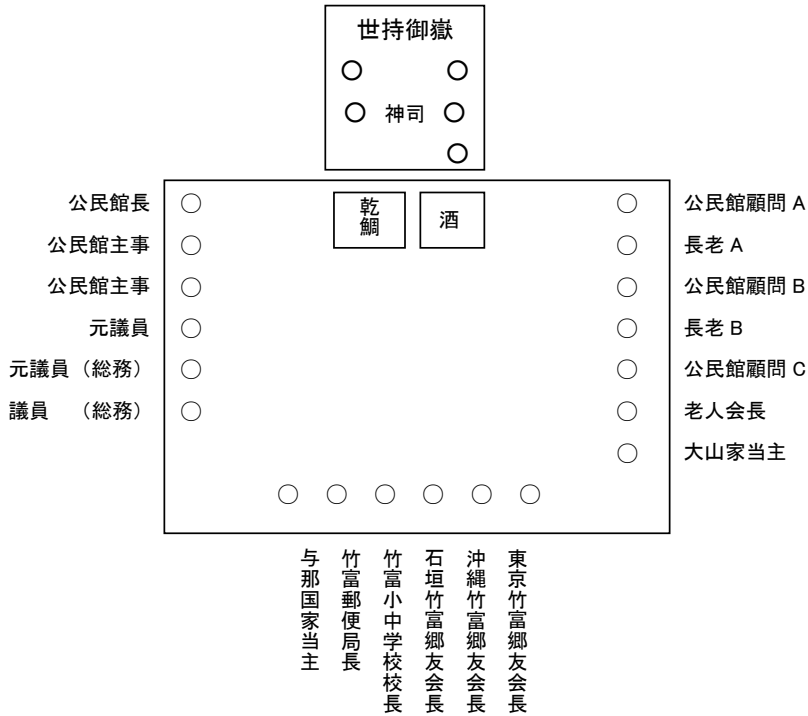
4. 種子取祭を動かす重立ち

「バルヒルの願い」を終えると、参列者は舞台に移動し、「乾鯛の儀」が執りおこなわれる。世持御嶽に向けた舞台に高膳二つが供えられる。高膳の上には、一つは御五水の入った鶴瓶、一つは短冊状に切った乾鯛（実際は、乾き物の“鯛ロール”を使用）の入った大皿が載せられる。祭主である公民館長が高膳の前に座って参列者を供応し、参列者が返礼をおこなう儀式である。まずは、参列者の長老順に三客まで供応し、次いで給仕が参列者全員に御五水と乾鯛を配っていく。この「乾鯛の儀」は、無言のうち、長時間かけて淡々とおこなわれる。

「乾鯛の儀」で、注目されるのは、参列者の顔ぶれである。「乾鯛の儀」初日の参列者と座順は、〈図 1〉のとおりである（二日目は、弥勒の与那国家当主は欠席。ほかは同じ顔ぶれ）。

「乾鯛の儀」参列者は、各種神事の参列者、「参詣」のメンバーとも重なっており、彼らが、種子取祭を動かしている中心的な人物である、ととらえることができる。すなわち、祭主である公民館長、それを補佐する主事（2 名）をはじめ、公民館顧問（3 名）・長老（2 名）・老人会長などの長老、議員・元議員（2 名）、与那国家当主・大山家当主が地元の重立ちとして参列する。これに竹富小中学校校長・竹富郵便局長といった公的機関の長が加わるとともに、島出身者代表として東京・沖縄・石垣の各郷友会の会長が列席する。このことから、種子取祭は、単に島内在住者だけの祭でないことが見えてくる。

ここで注目したいのは、地元の重立ちの経歴である。それを〈表 4〉に纏める。



〈図1〉「乾鯛の儀」初日の参列者と座順

〈表4〉「乾鯛の儀」に参列する重立ちの経歴

参列者\経歴	公民館長	主事	参列者\経歴	公民館長	主事
公民館顧問 A	○	○	老人会長	○	○
公民館顧問 B		○	元議員	○	○
公民館顧問 C	○	○	元議員 (総務)		○
長老 A	○	○	議員 (総務)		○
長老 B	○	○			

重要なことは、自治的組織である公民館の役職を過去にどのような形で経験していたかという点である。〈表4〉で明らかになることは、地元の重立ちは、すべてが公民館執行部である主事を務め、その多くが公民館長を経験している、という事実である。公民館主事は、種子取祭をはじめとする公民館行事に位置づけられている年間 21 の祭事・行事の実務を担当するとともに、地域の自治的活動に中心となって動く役割が課せられている。主事を経験するのは、たいてい、30～40 歳代である。この時期に、地域のために奔走することを通じて、地域社会の仕組みや人間関係を熟知することになる。また、主事を務めることにより、地域の人々から信頼され、やがて地域の重立ちへのプロセスを辿っていく。

もうひとつ注目されることは、種子取祭の実務を取り仕切る総務係が、議員・元議員を務め

た人であるという点である。一人は、水牛車観光及びマイクロバス観光事業を営む人、もう一人はクルマエビ養殖業ほか各種事業を営む人である。この二人は、竹富島における二大雇用口を提供し、島民からの人望も厚い人である。また、彼らは、島民の要望を行政へ伝える役割を担った人でもある。

種子取祭を動かしている中心的な人物は、島の自治政治・経済的にみて、重要な位置に置かれている人であることが明らかになる。彼らを中心に祭を執りおこなうことにより、島民の結束がより強固なものになり、祭をとおして地域社会の活力を生み出すことにつながっている、ととらえることができる。

5. 祭りの運営

2010年4月13日、「竹富公民館初議会」が開催された。初議会では、その年の公民館役員の報告とともに、公民館が関わる祭事行事日程が決定される。そして、「等級調べ」「生産人調べ」の報告とともに、「祭事賦課」の確認がなされる。

種子取祭の財政は、公民館の特別会計である。種子取祭の執行に当たり、例年、300万円余りの経費が必要となる。その経費の一部をそれぞれの家庭の状況に応じて負担するために、「等級調べ」「生産人調べ」がおこなわれるのである。

ところで、種子取祭を財政面からみると、どのようであろうか。収支の科目と2008年度決算の構成比を例示すると、〈表5〉のとおりである。

〈表5〉2008年種子取祭の収支決算構成比

[収入]3,215,500円

賦課金	老人賦課	一般寄付	基金繰入	夫役収入	雑収入	合計
16.0%	1.2%	79.4%	0.0%	1.9%	1.5%	100%

[支出]3,161,201円

幕舎費	座待費	マイク照明	供物費	船賃補助	接待費	行列費	配膳・茶内
0.8%	0.2%	3.3%	3.3%	1.9%	24.2%	6.3%	0.1%
踊り費	玻座間狂言	仲筋狂言	石垣謝礼	謝礼費	夫返し	雑費	合計
10.7%	3.4%	3.4%	1.3%	4.9%	2.8%	33.2%	100%

種子取祭収入の8割近くを占めるのが、一般寄付である。祭の日には、半紙に書いた寄付者芳名が貼り出される。ちなみに、2010年の寄付者は、初日が222件、二日目が112件の計334件であった。この件数は、島の世帯数の約2倍に相当する。氏名をみると、島外の者が大半を占めている。種子取祭には島出身者が多数帰郷するというが、彼らのご祝儀を包んで奉納芸能見物に訪れるのである。

寄付金額は、3千円、5千円、1万円などが多くみられる。なお、3千円以上の祝儀を持っていくと、奉納芸能見物の際に、弁当・オリオンビール・カップエビセンなどが配られる。そして、観覧客は飲食をしながら、狂言や踊りを楽しむのである。

帰郷者の中で注目されるのは、マリドシ（生年）と呼ばれる、その年の干支に生まれた人たちの集団である。おそろいの衣服を身につけて、観客席に座っている。聞くとところによると、同級会を兼ねての帰郷である、という。彼らは、祝儀 1 万円を包むのが慣わしとなっており、それが、一般寄付金の基幹となっている。財政的にみると、種子取祭は、島出身者とその関係者により支えられている部分が多いのである。

種子取祭執行に当たり、島内居住者も相応の負担をするのは、言うまでもない。負担は、金銭の「賦課」、労力の「夫役」に二分される。「賦課」は、世帯による「等級割」、個人毎の「男生産人賦課」「女生産人賦課」「老人賦課」と、細分化されている。いわゆる、分に応じて負担する原則が貫かれているのである。「賦課金」の詳細は〈表 6〉のとおりである。

〈表 6〉 2010 年種子取祭賦課金一覧

[世帯による等級割]

等級	家庭区分	年齢区分	賦課金額	世帯数 (151)
A 等級	男生産人家庭	18 歳～65 歳	3,900 円	56
B 等級	男中老家庭	66 歳～69 歳	3,800 円	19
C 等級	男敬老家庭	70 歳～89 歳	3,400 円	19
D 等級	女生産人家庭	18 歳～69 歳	2,900 円	29
E 等級	女敬老家庭	70 歳～79 歳	2,300 円	7
F 等級	男 80 歳以上家庭	80 歳以上	1,200 円	12
G 等級	女 80 歳以上家庭	80 歳以上	800 円	9

[個人毎の生産人・老人賦課]

男生産人賦課	女生産人賦課	老人賦課
3,000 円 (92 人)	2,000 円 (86 人)	500 円 (90 人)

種子取祭の島内居住者負担金は、以上の世帯による等級割の賦課金、個人毎の生産人・老人賦課の合算により算出される。ただし、病気等で入院している者の賦課金は免除となる。また、個人毎の生産人賦課金は、〈表 2〉の役を担当した者は徴収されない。なお、この等級割・生産人賦課システムは、賦課金額の違いがあるものの、種子取祭のほかに、自治会費に当たる公民館費及び祭事賦課（種子取祭以外の祭事）に採用されている。

種子取祭実施に当たり、「夫役」がある。種子取祭当日の奉納芸能の各種役割が「夫役」として位置づけられている。⁹⁾また、祭りの場となる世持御嶽境内の草刈り・清掃、舞台づくりの「幕舎張り」作業も「夫役」であり、「男子生産人」は、この「夫役」に参加することが義務づけられており、欠席した場合は「過怠金」が課せられる。

6. 奉納芸能

種子取祭第七日目（庚寅）、第八日目（辛卯）は、世持御嶽に芸能が奉納される。芸能は、庭の芸能、舞台の芸能に分かれ、庭の芸能は両日も島内三集落により奉納される。また、舞

台の芸能は、芸能初日（庚寅）は玻座間の東・西集落、第二日目（辛卯）には仲筋集落が中心になって奉納される。

庭の芸能は、「参詣」終了後、9時半頃から約1時間にわたって、世持御嶽前の広場でおこなわれた。演目は、〈表7〉のとおりである。

〈表7〉2010年種子取祭・庭の芸能

1	棒術	玻座間・仲筋の男性が共同して奉納
2	太鼓	竹富小中学校の教員・男子生徒が奉納
3	マミドー	仲筋の野原富子ほか14名の女性が奉納
4	ジッチュ	玻座間・西集落の上間典枝ほか18名の女性が奉納
5	マサカイ	玻座間・東集落の細川京子ほか16名の女性が奉納
6	祝種子取	石垣郷友会婦人部41名が奉納
7	腕棒（ウデボー）	仲筋の野原亜季ほか13名の女性が奉納
8	乗馬者（ソーマヌシャ）	玻座間民俗芸能保存会24名の男性が奉納

*二日目は、雨で地面がぬれていて危険なため、腕棒は省略となった。

上記8演目の中で、農耕儀礼的要素を持つものに、マミドー・ジッチュ・マサカイの3演目がある。マミドーとは、マー（真）ミードー（女）のことで、立派な女、女の中の女、働きの女を意味する。白頭巾を被った女性がカマ、クワ、ヘラを持って、種子蒔き、作物の成長などを歌い、踊る。ジッチュとは、「十人」を意味するとも、踊り手の掛け声「シチュ」から名づけられたともいう。白鉢巻をした女性がクバ笠を手にし、重税の中で十人の子供を育てて年貢を完納した百姓が国王に拝謁できた喜びを踊る。マサカイとは、「真栄」という人名に由来する。真栄は、大山家に生まれ、19歳で分家して小山家の祖となり、西表島に移住・開拓した人という。白頭巾を被った女性がクワを持って、その開拓の様子を歌い、踊る。

庭の芸能が終わると、引き続き舞台の芸能となる。舞台の芸能は、世持御嶽前の幕舎内で、二日間にわたって夕方近くまで奉納される。芸能初日（庚寅）は、「長者」に始まり、「曾我の夜討」までの36演目が、東・西集落・保存会・山森喜代子舞踊研究所（山森舞）・大盛和子舞踊研究所（大盛舞）・與那国久枝八重山の踊り稽古道場（與那国舞）・赤山正子八重山民俗舞踊練場（赤山舞）・東京郷友会・沖縄郷友会により奉納された。初日の演目は、〈表8〉のとおりである。

これら36演目のうち、幕開けの「長者」「弥勒」は、初日・二日目の両日にわたって奉納される演目である。「長者」はホンジャーともいう。すなわち、フン（組）・イイジャー（父）、芸能の統率者を意味する、という。ホンジャーは、玻座間では国吉家当主、仲筋では生盛家当主が代々その役を務めるのが慣わしである。種子取祭初日（甲申）、芸能の配役を決める行事であるトゥルッキにおいて、両家は中心的な役割をはたす。演目「長者」においては、翁に扮したホンジャーが豊作を祈願し、芸能を演じる許可を役人に願い出て、これからおこなう舞台の芸能の開始を宣言する。

〈表 8〉2010 年種子取祭・舞台の芸能（初日）

1	長者[狂言] (国吉家当主)	2	弥勒[狂言] (与那国家当主)	3	スー踊り (西支会)	4	鍛冶工[狂言] (保存会)
5	赤馬節 (西支会)	6	八重山上がり口説 (西支会)	7	組頭[狂言] (保存会)	8	ササラ銭太鼓 (西支会)
9	仲良田 (山森舞)	10	世持[狂言] (保存会)	11	元タラクジ (西支会)	12	大浦越路 (大盛舞)
13	竹富育ち (西支会)	14	世曳き[狂言] (保存会)	15	揚口説 (西支会)	16	海晒し (與那国舞)
17	祝種子取節 (西支会)	18	みやらび (山森舞)	19	伏山敵討[狂言] (保存会)	20	胡蝶の舞 (西支会)
21	赤また一節 (東京郷友会)	22	鳩間節 (與那国舞)	23	繁昌節 (赤山舞)	24	竹富口説 (西支会)
25	ペーク漫遊記 [狂言] (保存会)	26	しきた盆 (東支会)	27	夜雨節 (與那国舞)	28	玻座間口説 (東支会)
29	安里屋節 (東支会)	30	ガイジンナー [狂言] (保存会)	31	種子取節 (東支会)	32	秋の踊り (沖縄郷友会)
33	真栄節 (東支会)	34	赤また一節 (山森舞)	35	組長刀 (東支会)	36	曾夜の夜討 [狂言] (保存会)

* () は、奉納者。「保存会」とは、玻座間狂言部が結成する「玻座間民俗芸能保存会」。

「弥勒」は、海の彼方から豊作をもたらすカミとして信じられている。現在、世持御嶽の東側に建つ弥勒奉安殿に安置されている弥勒の仮面は、奉安殿建築以前は与那国家に保管されていた。¹⁰⁾この仮面をつけて弥勒カミに扮した与那国家当主が、シーザ（二才）4名と、大勢の供・子供を連れて舞台に登場し、五穀豊穡の祈りを込めて踊る。

ほか34演目の内訳は、保存会（玻座間狂言部）が演じる狂言8演目、西支会の踊り10演目、東支会の踊り6演目、四つの舞踏研究所の踊り8演目、東京郷友会・沖縄郷友会の踊り各1演目である。西支会と東支会は、隔年で踊りの数が違っているが、2010年は西支会が多くを受け持っている。

ここで注目されるのは、四つの舞踏研究所・東京郷友会・沖縄郷友会からの踊りが奉納されることである。これらは、いずれも竹富島出身者で結成する組織である。種子取祭は、財政的にみて島出身者を中心とする寄付金に負うところが少なくないが、奉納芸能の踊りもまた、島出身者の参加を得て成り立っている、ということができる。¹¹⁾

一方、二日目（辛卯）の舞台の芸能は、「弥勒」を除いて、すべて仲筋集落によって奉納される。二日目の30演目は、〈表9〉のとおりである。

〈表 9〉2010 年種子取祭・舞台の芸能（二日目）

1	長者[狂言]	2	弥勒[狂言]	3	シドゥリャニ[狂言]	4	かぎやで風
5	揚作田節	6	天人[狂言]	7	たのりゃー	8	世果報花
9	蔵ぬ花	10	竹富節	11	種子蒔[狂言]	12	夜雨節
13	揚古見ぬ浦	14	父子忠臣[狂言]	15	扇子舞	16	夏花
17	畑屋ぬ願い[狂言]	18	かたみ節	19	盛山ぬドッケマー	20	する掬い[狂言]
21	仲筋ぬヌベー	22	式の舞	23	古見ぬ浦	24	仲良田節
25	まるまぼんさん	26	長刀の舞	27	崎山節	28	サングルロ
29	海上節	30	鬼捕り[狂言]				

「弥勒」の次に奉納される「シドゥリャニ」は、舞台の芸能のほかに、まだ夜が明けきらぬ二日目の早朝、発芽した種子がすくすくと成長することを願う儀式「ムイムの願い」の後、おごそかに奉納される。島の長老4名が世持御嶽に出かけて、神にシドゥリャニ踊りをささげ、豊作を祈願する内容である。「シドゥリャニ」とは、千鳥の群れともいわれるが、多くの謎に包まれた狂言、とされている。

初日・二日目とも舞台の芸能の踊りに関して、農耕儀礼的な要素はほとんどみられないが、狂言においては、農耕的な題材が含まれているものが多い。初日では、「鍛冶工」「組頭」「世持」「世曳き」の4演目が、また二日目では、「シドゥリャニ」「天人」「種子蒔」の3演目がそれに相当する。これらは毎年必ず演じられるもので、例（儀）の狂言ともいう。

初日の「鍛冶工」は、鍛冶工主・鞆親父・前打（2名）の4名が、農具づくりの鍛冶の様子を演じる狂言である。鉄器の伝来と豊作の歌がうたわれる。「組頭」は、組頭・助勢役・若者（4名）が演じる「薄崩し狂言」ともいわれる演目である。組頭は、「鍛冶をして農具を整えたので、ススキなどを取り除いて畑の整地をする」と述べ、若者を呼び出して農作業の所作をする。これは荒地の開墾を表現するものである。「世持」は、世持・若者（4名）が演じる「種子蒔狂言」ともいわれる演目である。世持（村の責任者）は、「恵みの雨が降ったので、種子を蒔こう」と述べ、若者を呼び出して種子蒔きの所作をする。「世曳き」は、大山大主・若者（2名）・孫（2名）が登場する。竹富島の豪農であった大山大主が豊作を喜び、それを与人（役人）と神様に報告する内容の予祝儀礼である。

二日目の「天人」は、天人・老人・若者（4名）が登場する。天人（琉球神話に登場する国造り・稲作を始めた神）が長老に種子を与え、作物の作り方を教えるという内容であり、農作業を舞踏化したマミドーが踊られる。「種子蒔」は、世持・若者（4名）・少年が登場する。世持が「戊子の種子取の今日、種子蒔きをする」と述べ、粟の種子蒔きから生育・除草・収穫・収穫祝いの一連のプロセスを舞台の上で再現する予祝芸能である。

舞台の芸能として奉納される60余りの演目は、固定的なものもあるが、新たな要素が付け加わった部分が少なくない。すなわち、種子取祭・舞台の芸能は、時代とともにその内容を少しずつ変えてきたのである。狩俣恵一は、「両村（坡座間・仲筋）は相互に負けまいと切磋琢磨してきた。しかもその傾向は古くからあり、競って外来の芸能（沖縄本島の宮廷芸能や本土

の近代演劇)を導入してきた」との指摘をおこなうとともに、時代的傾向について、以下に整理している。¹²⁾

〈第1期(1903年の人頭税廃止～1945年の終戦):旧来の士族の支配が終わり、組踊や宮廷舞踏などを盛んに取り入れた。

第2期(1946年～1976年の国立劇場公演まで):玻座間村は近代演劇を得意とし、仲筋村は伝統芸能を得意とする傾向が顕著になったと思われる。昭和40年代に入ると、徐々に種子取祭の保存継承の意識が強くなった。

第3期:(1977年～現在):国立劇場の公演を契機に、演出や衣裳などに関心が高まった。また、幕合いの時間をなくして間断なく舞台芸能を奉納するようになった。)

種子取祭は、「国指定重要無形民俗文化財」であるものの、伝統的な芸能の形を踏襲することにこだわっていない点が面白い。極端な話、初日の狂言「ガイジンナー」には、BEGINの唄「竹富島で会いましょう」すら、演奏されるのである。

7. ユークイ(世乞い)

奉納芸能とともに、人々が心待ちにしている行事が、初日の舞台の芸能の後におこなわれるユークイである。ユークイには、島民・島出身者はもとより観光客も参加できるのが魅力である。ユークイとは、家々を訪ねて五穀豊穡や家の幸せを予祝する行事である。

初日の舞台の芸能の最後の演目「曾我の夜討ち」がお開きになると、世持御嶽前に参集した人々は、イバン戴みの儀式をおこなう。神前にお供えしてあったクネンボの葉が参加者に配られる。この葉をティサージに折り込み、鉢巻きとする。この鉢巻きをつけた人は、すべてのユークイを終えて、翌朝、イバン返しの儀式に戻ることが義務づけられる。ユークイの一部に参加する人も、ティサージを鉢巻にするのが慣わしであるが、そこにはイバンの葉は入っていない。

すでに陽は落ち、あたりは暗くなっている。世持御嶽を出発したユークイの一行は、神司を先頭に、ナビンドゥ(神の道)を南下し、根原家(根原金殿の子孫と伝える)に向かう。人々は、道中、銅鑼・太鼓の伴奏で、「道歌」を歌う。「道歌」には、弥勒の世・神の世・麦の豊作・粟の豊作・米の世を賜り、豊作到来の願いが込められている。

根原家前の道では、親戚縁者がユークイの一行を出迎え、手招きの所作を繰り返す。招き入れられた人々は、母屋の前の庭で輪になって、「巻歌」を歌う。「巻歌」は、種子取祭を統一したと伝承される根原金殿と、そこを訪れるアンガマ(覆面をした来訪者)とのやりとりが、その内容となっている。根原家を訪れるアンガマは、やがて統一されていく六御嶽の曾長たち、と解されている。

ユークイの一行は、「巻歌」に続いて「しきどうよ」を歌い、その後、根原家の子供を胴上げする。最初に胴上げされた男児は、火のついたように泣きだしたが、胴上げは止めない。次に胴上げされた女兒は、愉快そうに微笑んでいる。胴上げの最中、周り人々は「世は稔れ、世は稔れ」「種子は割れよ、種子は割れよ」「もっと稔れ、もっと稔れ」といった意味の言葉で囃したてる。

胴上げを終えた一行は、根原家の座敷に上がりこむ。人々は、まず、祭壇となった一番座の床の間に礼拝し、次いで二番座の位牌棚を拝む。その後、祭壇前に供えてあったお神酒・ニン

ニク・タコが参集者に振る舞われる。一段落した後、蒔かれた種子がしっかり根を下ろすことを願う「いぬがだにアヨー」、粟の成長から収穫を予祝する「根下りユンタ」が歌われる。座敷に入りきれぬ人や世乞いに参加した観光客は、庭先で振る舞いを受けて、祭の雰囲気に入っている。

時刻は夜の8時、ユークイの一行は三集団に分かれて根原家を出発し、三集落の家々を巡る。2010年のユークイは、東集落7軒、西集落11軒、仲筋集落5軒でおこなわれた。三集落の順路は、以下のとおりである。

東集落：宇根家～与那国家（弥勒）～顧問宅～主事宅～ユークイを申し出た各家～宇根家。

西集落：神司宅～国吉家（長者）～顧問宅～ユークイを申し出た各家～有田家。

仲筋集落：生盛家（長者）～神司家～主事宅～ユークイを申し出た各家。

ユークイにおいては、先に紹介した根原家とほぼ同様なことが繰り返される。ユークイの終了時間は、東集落が午前2時、西集落が午前3時頃であった。仲筋集落は、二日目の奉納芸能を控えているためユークイに回る家数も少なく、早めに終わるのが慣例となっている。かつては、夜通しユークイをやったものであるが、近年は、そのようなことはない。

私が、見学したユークイの心に残った一場面を紹介する。それは、東集落の与那国家での光景である。「弥勒」を演じた与那国家の座敷には、ユークイに訪れた人々があふれていた。この来訪客に酒・ニンニク・タコを振る舞うのは女性の役割で、親戚の女性も手伝いに駆けつけている。その中でかいがいしく働いている人に、与那国充子・貴子姉妹がいた。彼女らは、母・久枝とともに、その日、舞台の芸能「海晒し」「鳩間節」「夜雨節」を奉納した與那国久枝八重山の踊り稽古道場（石垣島）の人であった。聞くと、竹富民芸協会を設立した与那国清介の孫で、奉納芸能をとおして今も島との心の絆を持ち続けている、という。あのハレの舞台をつとめた後、夜は下働きの給仕役に回っているのである。その心労は、計り知れないものがあるが、はちきれんばかりの笑顔で奉仕する姿は輝いている。

種子取祭は、島民はもとより、島に熱い思いを寄せる島出身者のたゆまぬ奉仕で成り立っていることを思い知らされる光景であった。

8. 種子取祭 2010 を振り返って

種子取祭の最終日、公民館執行部・地域の重立ちと三郷友会長との懇談会が竹富島まちなみ館で開催された。公民館長からの依頼で、私はこの懇談会をビデオで記録する役を仰せつかった。種子取祭を関係者がどのように捉えているのかが、種々意見から見えてくるので、その要点を記載したい。

懇談会は、上勢頭芳徳公民館長の司会でおこなわれた。まず、長老である92歳になる赤山喜介（竹富公民館・顧問）が口火を切り、会の趣旨を述べた。

「私も、92年間ずーっと見つめておりますけれど、神行事の種子取祭が無事できるということは、ムーヤマ（六御嶽）の信仰が、どれほど今日まで続いているかを物語ることかと思えます。東京、沖縄などの郷友会の方々が、遠いところから、お暇を繰り合わせ、多額の旅費をつかって来られ、一緒に祭に奉仕されることは頭が下がる思いです。この種子取祭は、自分の目で見て、肌で触れて、その重みが始めて分かりますので、二世、三世となった後輩

も呼び寄せていただきたく思います。今日は、この種子取祭をどのように継承していくかということに重点をおき、保存に対しても皆さまのお考えを聞かせていただきたいと思います」

この赤山の挨拶を受けて、比嘉千都代（東京竹富郷友会・会長）が、島で祭に奉仕している人々にお礼を込めて語る。ちなみに、比嘉は、舞台の芸能初日に東京竹富郷友会の出し物「赤また一節」を踊った人である。

「中学卒業と同時に島を離れました。48歳のマリドシ（生年）に客席に座って芸能を見て、すごく感動しました。トイレに立つのもおしいくらいでした。還暦のときも同じような気持ちで見たんですけど、今回、舞台に立って改めて感じたことは、下働きの方々がどれほど一生懸命に支えて、この種子取祭が成り立っているかということです。郷友会長の役を無事終えられましたら、下働きのお手伝いをしたいな、そういう形で種子取祭に参加したい、と思っています。そうすれば、本当の種子取祭が分かるんじゃないか、と思います」

玉盛健（沖縄竹富郷友会・会長）の話が続く。沖縄竹富郷友会からの積極的な種子取祭への関わりを語り、こんなエピソードを添えた。

「今回、はじめて三線の奏者も那覇から連れて参りました。竹富民謡愛好会という三線のサークルをつくりました。毎週、竹富の歌を中心に勉強しております。そのメンバーをぜひ種子取祭に参加させたいという希望がありまして、裏方の三線もいっしょに連れてきたことを嬉しく思っています」

さらに、古堅廉太郎（石垣竹富郷友会・会長）が、石垣島在住の二世、三世に対する課題について話す。

「竹富島の神々に対する信心が小さいころから心にないと、種子取祭はできません。石垣島にいる二世、三世の方は、種子取祭を単なる祭としてとらえている人もいます。舞台で演じる方は“余興じゃない、奉納だ”と言われます。師匠から“手の間違い、足の間違い、口の間違いがないように”と言われます。余興だったら、誤魔化して楽しめばいい。“奉納”という意味で、種子取祭は違います。参加する中で、そういう気持ちが芽生えるかどうかが問題になります。いわゆるお祭り気分になってしまっただけでは困ります。集団的にこういう祭に参加させるきっかけをつくって、その中から五感で感じていくことが大切です。私たち郷友会では、種子取祭の勉強をして、行事に対する心構えを大切にしたいと、組織的な取り組みをしています。また、種子取祭に参加することによって、自らそのことを考えて行動する若い人を育てていけたらいいなあ、という感じをもっています」

三つの郷友会会長の話が終わると、長老の一人、内盛正玄（竹富公民館・顧問）が、方言で、朴訥と熱い思いを語った。かろうじて、聞き取れたのは、次の一言であった。

「…ファーマー（子孫）にも諭してもらって、いつ、いつ世までも、このタナドゥイ（種子取祭）が、タナドゥイだけでなく、タキドゥン（竹富島）の行事あれこれがスムーズにいくように…」

三長老の一人、前本隆一（竹富公民館・顧問）の話は、下働きの「座待」（ザータイ）に及ぶ。「座待」は、会場設営の莫産を敷きつめ、後片付けなど5日目から8日目までの雑用全般を務める。

「竹富島は人口が少ないので、十分に手がまわりません。座待は5名しかおりません。5名

では、後片づけができないんですよ。石垣から来た人は、船の時間があるから片づけを手伝えない。竹富の人も、ハジリ（狂言部の人々がホンジャー一家に集合し、奉納芸能が無事に済んだことを報告する儀式）があるので、急いで帰らなければならない。奉納芸能が終わって残るのは、座待係だけです。でも、竹富に来られた先生方が島を愛し、学生たちを連れてきて加勢してくださる。協力せんと大変だ、ということを理解していらっしゃる。このことには、心から感謝しております」

これは、懇談会のオブザーバーとして参加した、我々研究者に配慮した謝辞でもあった。

長老の後に、これからの種子取祭について、生々しく語ったのは、上勢頭保（種子取祭総務・元町議会議員）である。総務係は、種子取祭運営の要となる人であり、2名がこの役を受け持っている。

「今年の種子取祭は、土・日にも当たらず、また石垣の登野城で12年に1回の結願祭があったため、どれだけ人が来てくれるか心配でした。700個の弁当をどう配分するか、どう接待するかということで、一緒に総務を担当した新田長男君と話し合いました。結局、半々の350個ずつにしましたが、初日は、5〜6個余っただけで、まずまずでした。

それと、もうひとつの心配事は、どれだけ寄付が集まるかということ。寄付がこないと、“総務が悪いから寄付が集まらない”ということにもなりかねない（笑）。寄付は、初日が約190万円、二日目が約60万円で、合わせて250万円でした。何とか、ギリギリの線でいけた、と安心しております。正直なところ、マリドシ（生年・干支）の皆さんが1万円くらいずつ奉仕をしてくださっているものですから、何とかやってこれますけれど、49歳が7名なんです。61歳が20名、73歳が20余名、85歳が10名くらいでした。

とにかく、団塊の世代の次から人が少なくなっています。うちの娘の世代になると、同級生は、2人しかいません。ですから、たとえ竹富で生まれていなくても、郷友会の二世、三世の皆さんと連携して、郷友意識をしっかりと持って、持続可能な形で種子取祭を受け継いでいくことが大きな課題だ、と思います」

富本傳（竹富町副町長）の話が続く。石垣島在住の富本は、玻座間狂言部の一員でもある。竹富町役場は、石垣市にある。台風シーズンになると船が欠航する恐れがあるため、時間的に通勤可能であるものの、役場職員の大半は石垣市に居住している。台風災害対策のときに役場に出勤できないと、仕事にならないからである。

「仕事柄、なかなか練習に行けなくて、皆さまに迷惑をおかけしながらも、大役を仰せつかって舞台を無事済ませることができて嬉しいと思っています。今、心地よい疲労感に浸っております。町内の島巡りが私の仕事ですが、皆さんが地域のために頑張っている姿を見たら、我々行政の立場としても、それが原点かなあ、と思います。祭をとおして、皆さんがこれだけ島を愛する姿を見て、ほかの島も竹富を見習ってほしい、という気持ちが個人的にあります。地域づくり、まちづくりは、島からの考え、島の心が原点であります。種子取祭に参加して、そのような実感ももちます」

今年の4月に島の学校に赴任した漢那憲吉（竹富小中学校・校長）も懇談会に出席して、地域と学校との連携について、こんな意見を述べた。

「島の伝統文化、芸能を引き継ぐ子どもたちを育てるためにも、学校として、ぜひ、今後も

できる限りの協力はしていきたい。また、職員も一緒になって、竹富島を盛り上げていきたい、と思っています。昨日、一昨日と、子どもたちは、たいへん喜んで参加していましたので、私の顔も弥勒様みたいです（笑）」

上間毅（元県議会議員）は、ユークイ行事の継承について、次の意見を述べた。

「ユークイの行事は、種子取祭において、非常に重要な役割をはたしている、と思います。しかし、今、ユークイをされているのは、70歳以上のお家なんです。ユークイ行事を続けていくことには、非常に厳しい面が出てきているんですよ。ユークイをするには、大きな負担がかかります。負担というのは、お金の問題じゃなくて、それを準備する手間なんです。もうひとつは、踊りを踊る庭の問題。庭に植え込みをすると、ユークイができなくなります。二世、三世にユークイをぜひ引き継いでいくんだ、という意識を持たすことが大切だ、と思います。島に定住はするけれど、ユークイはさせない、これは問題です」

ひととおりの話が終わった後、阿佐伊孫良（竹富島老人会・会長）の乾杯の合図で、昼食をとりながらの意見交換となった。そして、最後に、新田長男（種子取祭総務・町議会議員）が、このように締めくくった。

「今年は、議会会期中に種子取祭を迎えてしまって、たいへんでした。副町長、総務課長、議会事務局長と、議会に出席しなければならない町役場の職員が、笛吹きや狂言で種子取祭に出なければならない人です。これは、どんなにしても議会を終わらせにやいかん、そう考えていました。ある人から“竹富の種子取祭は議会の日程を変更させるくらい盛んなのか”と言われました。“当たり前だろう。国が指定しているものを竹富町議会でゴチャゴチャ言う問題ではない。どんなことがあっても終わってくれ。でなければ、休会にして議員皆で見に行くくらいのことであってもいいだろう”私は、そんな風に話しました。と、言うことで、前日に議会を終えて、皆、参加することができました。

十分な打ち合わせをしないまま、祭の日を迎えてしまったのですが、どうにか、無事にすべてのことを終えることができましたのは、ムーヤマ（六御嶽）の神様のおかげだと感じています。ムーヤマの神々の力は当然ですけれど、皆さまが竹富島に寄せる思い、この種子取祭にかける思いが、神様に通じたと思って、感謝しています。

これは、我々の代で終わる行事でもないし、終わらすわけにもいきません。今日のご意見を踏まえて、また来年に活かして、自分ができる範囲での協力をいただきたい、と思います」

懇談会に参加した人々の誰もが、次の祭を更に良いものにしていきたい、そんな思いをもっていることが、言葉の端々から伝わってくる。

まとめ

最後に、種子取祭をとおして、地域社会の姿がどのようにみえてくるのかを整理して、本稿のまとめとしたい。

沖縄県竹富島の種子取祭は、秋の甲申の「トゥルッキ」に始まり、壬辰の「支払い議会」まで9日間にわたっておこなわれる、農耕儀礼を基にした祭事である。種子取祭の内容は、神事・種下ろし・奉納芸能・ユークイに大別される。主要な神事は、1日目の「トゥルッキ」に始まり、5日目の「種子取祭の願い」、7日目の「弥勒起こし」「玻座間御嶽での祈願」「バルヒルの

願い」、8日目の「ムイムの願い」である。種子取祭において、最も大切な播種儀礼は、5日目（戊子）に、粟作を営む農家の戸主がそれぞれおこなう「種下ろし」である。これは、当主が畑に行き、ヘラ（農具）で土をならし、粟の種子を実際に蒔き、「戊子に蒔いた種子が立派に育ち、豊作になりますように」との唱えごとをする行事である。ところが、粟作が衰退した現在、この行事は廃絶寸前となっている。

種子取祭は、六御嶽に仕える5名の神司（1名欠員）を中心に、公民館長が祭主となり、2名の公民館主事がこれを補佐し、各種の役割を持った島民による祭礼組織で執りおこなわれる。2010年の役割表に実際名前が挙がっていたのは、男性42名、女性44名であったが、人々の協力で充足することができた。種子取祭には18歳～69歳人口の半数以上の人が、当初から何らかの役割を持って関わっている。

とりわけ、奉納芸能に関わりを持つ人が半数以上を占めているのが特徴である。奉納芸能は、男性が狂言、女性が踊りを受け持つ。竹富には、東・西・仲筋の三集落があり、東・西集落の男性が座間狂言部を、仲筋集落の男性が仲筋狂言部を結成している。また、女性の踊りグループは、三集落のそれぞれの支会ごとに結成されている。2010年の役割表に実際名前が挙がっていた人数は、狂言部男性21名、踊りの女性28名である。ほかに地唄を受け持つ人が6名いる。人口わずか300人余りの小島で、これだけの奉納芸能をおこなう人がいることに驚嘆する。

種子取祭で注目されるのは、祭主である公民館長が高膳の前に座って参列者を供応し、参列者が返礼をおこなう「乾鯛の儀」の列席者の顔ぶれである。「乾鯛の儀」参列者は、各種神事の参列者、「参詣」のメンバーとも重なっており、彼らが、種子取祭を動かしている中心的な人物である、ととらえることができる。そこには地元の重立ちのほかに、公的機関の長が加わるとともに、島出身者代表として東京・沖縄・石垣の各郷友会の会長が列席する。このことから、種子取祭は、単に島内在住者だけの祭でないことが見えてくる。

この、種子取祭を動かしている中心的な人物は、島の自治政治・経済的にみて、重要な位置に置かれている人であることが明らかである。彼らを中心に祭を執りおこなうことにより、島民の結束がより強固なものになり、祭をとおして地域社会の活力を生みだすことにつながっている、ととらえることができる。

種子取祭を財政的にみると、収入の8割近くを占めるのが、一般寄付である。種子取祭は、島出身者とその関係者により支えられている部分が多いのである。種子取祭執行に当たり、島内居住者も相応の負担をするのは、言うまでもない。負担は、金銭の「賦課」、労力の「夫役」に二分される。「賦課」は、世帯による「等級割」、個人毎の「男生産人賦課」「女生産人賦課」「老人賦課」と、細分化されている。いわゆる、分に応じて負担する原則が貫かれているのである。

種子取祭第七日目（庚寅）、第八日目（辛卯）には、世持御嶽に芸能が奉納される。芸能は、庭の芸能、舞台の芸能に分かれ、庭の芸能は両日も島内三集落により奉納される。庭の芸能8演目の中で、農耕儀礼の要素を持つものに、マミドー・ジッチュ・マサカイの3演目がある。初日・二日目とも舞台の芸能の踊りに関して、農耕儀礼的な要素はほとんどみられないが、狂言においては、農耕的な題材が含まれているものが多い。初日では、「鍛冶工」「組頭」「世持」

「世曳き」の4演目が、また二日目では、「シドゥリヤニ」「天人」「種子蒔」の3演目がそれに相当する。

舞台の芸能として奉納される60余りの演目は、固定的なものもあるが、新たな要素が付け加わった部分が少なくない。すなわち、種子取祭・舞台の芸能は、時代とともにその内容を少しずつ変えていったのである。種子取祭は、「国指定重要無形民俗文化財」であるものの、伝統的な芸能の形を踏襲することにこだわっていない点が面白い。

「伝統」を守るとは、何も、古いものを意味もなく踏襲することではない。民俗学者・宮本常一は、「伝統」について、次のように語っている。

「ものを生み出してゆき、変えていく力ですね。それがぼくは本来の伝統っていうものだと思うんです」

その時代、時代に対応して変わっていくことが大切である。また、それを必要とするエネルギーが新たなものを生み出していく。そこが文化継承にとって大切である、という見解である。種子取祭は、まさにそのようなエネルギーに満ちた祭である、といえよう。

島民・島出身者など種子取祭を支える人々は、この祭を神行事としてとらえている。それは、次の言葉に象徴される。

「無事にすべてのことを終えることができましたのは、ムーヤマ（六御嶽）の神様のおかげだと感じています。ムーヤマの神々の力は当然ですけれど、皆さまが竹富島に寄せる思い、この種子取祭にかける思いが、神様に通じたと思って、感謝しています」（種子取祭総務・町議会議員）

「竹富島の神々に対する信心が小さいころから心にないと、種子取祭はできません。舞台上で演じる方は“余興じゃない、奉納だ”と言われます。師匠から“手の間違い、足の間違い、口の間違いがないように”と言われます。行事に対する心構えを大切にしたい」（石垣竹富郷友会・会長）

しかし、人口300人余りの島で、この祭事を継承していくためには、課題も少なくない。その課題を、関係者は、次のように指摘する。

「竹富島は人口が少ないので、充分に手がまわりません。座待は5名しかおりません。これをどうするかが課題」（竹富公民館・顧問）

「ユークイをするには、大きな負担がかかります。負担というのは、お金の問題じゃなくて、それを準備する手間。二世、三世にユークイをぜひ引き継いでいくんだ、という意識を持たすことが大切」（元県議会議員）

「団塊の世代の次から人が少なくなっています。郷友会の二世、三世の皆さんと連携して、郷友意識をしっかりと持って、持続可能な形で種子取祭を受け継いでいくことが大きな課題」（種子取祭総務・元町議会議員）

種子取祭を次世代に継承するためには、学校、島出身者を含めた取り組みが必要である。すなわち、体験をとおして祭を継承する仕掛けをつくっていくことが大切である、との指摘である。その意識が強いことは、次の言葉が物語っている。

「島の伝統文化、芸能を引き継ぐ子どもたちを育てるためにも、学校として、ぜひ、今後もできる限りの協力はしていきたい」（竹富小中学校・校長）

「この種子取祭は、自分の目で見て、肌で触れて、その重みははじめて分かりますので、二世、三世となった後輩も呼び寄せていただきたく思います」(竹富公民館・顧問)

種子取祭の取材で 10 日間滞在した竹富島で見聞したのは、どんな下働きでも、その役を喜んで受け持ち、祭に参加している人々の姿であった。島民は、「うつぐみの心」(一致協力してことに当たる心)が発揮できるのは、この種子取祭である、と口をそろえて話す。地域づくりは、その心が原点であることは、次の言葉にもあらわれている。

「地域づくり、まちづくりは、島からの考え、島の心が原点であります。種子取祭に参加して、そのような実感をもちます」(竹富町副町長)

竹富島の地域社会を支えているのは、このような島民の心をはじめ、島出身者の故郷を思う気持ちである、という感を強くする。と、同時に、島にほれ込み、島の土になろうとする人々の存在も忘れてはならない。ちなみに、2010 年種子取祭を執りおこなった竹富公民館執行部 3 名の内 2 名は、島外出身者である。祭主・公民館長は復帰 2 年後に島に來住し、島を外部資本の開発行為から守ろうと、島に根を下ろした人である。また、主事の一人は、都会での仕事を捨てて、子どもを竹富島で育てる決意で家族ともども島にやってきた人である。そのような人々のエネルギーをも取り込みながら祭が成り立ち、地域社会が活性化していく姿を、種子取祭から読み取ることができる。

謝辞

本稿は、愛知淑徳大学研究助成成果報告の一部である。研究費をいただいた大学当局に感謝申し上げますとともに、調査研究を実施するに当たりご協力いただいた新田初子氏(神司)、島仲由美子氏(神司)、上勢頭芳徳氏(公民館長)、前本賢二郎氏(公民館主事)、三浦彰徳氏(公民館主事)、前本隆一・武子氏(公民館顧問・妻)、内盛正玄氏(公民館顧問)、阿佐伊孫良氏(老人会長)、与那国吉哲氏(弥勒)、国吉栄二氏(ホンジャー)、生盛大和氏(ホンジャー)、根原康尚氏(根原家当主)、野原富子氏(仲筋踊り師匠)、上勢頭同子氏(西集落踊り師匠)、大底勝子氏(たきどうん)、友利由紀氏(こぼし文庫部長)、大塚勝久氏(写真家)、上勢頭達子・篤・享子氏(民宿泉屋)ほか関係者各位に感謝申し上げたい。

注

- 1) 谷沢明「沖縄県竹富島における観光文化に関する考察」(『愛知淑徳大学論集・現代社会学部篇』第 14 号、2009 年、所収)
- 2) 谷沢明「1970 年代前期の開発と保存に関する動向～沖縄県竹富島における観光文化研究(1)～」(『愛知淑徳大学論集・現代社会学部篇』第 15 号 2010 年、所収)
- 3) 谷沢明「1980 年代の集落保存に関する動向～沖縄県竹富島における観光文化研究(2)～」(『現代社会研究科研究報告』第 5 号、2010 年、所収)
- 4) 谷沢明「集落景観・地域文化を活かす地域づくり～沖縄県竹富島における観光文化研究(3)～」(『愛知淑徳大学論集・交流文化学部篇』創刊号、2011 年、所収)
- 5) 「公民館祭事・行事」として位置づけられた行事を指す。
- 6) 上勢頭亨『竹富島誌 民話・民俗篇』、1976 年、法政大学出版局 p 156～157
- 7) 前掲 6) p 17～19
- 8) 狩俣恵一「竹富島の種子取祭」(全国竹富島文化協会編『芸能の原風景』瑞木書房、1998 年、所収) p 372
- 9) 種子取祭の役割表には、「夫役表」という文言が使われている。
- 10) 弥勒の仮面は、仲道家の先祖が海岸で拾って拝み始めたが、後に与那国家に譲られたという。
- 11) 昭和 50 年前後から石垣島在住の島出身者が芸能部の一員として大きな役割をはたすようになったという。
- 12) 前掲 8) p 358